

バルザック『老嬢』における〈中傷の歌〉

博 多 かおる

序

19世紀フランス社会の現実を描き残そうとした作家バルザックは、集団が繰り返す同じ話題に触れながら発展させてゆく会話というものに多大な関心を抱いていた。それは、噂、陰口、中傷などが人々の運命を左右する力を持ち、社会やグループの利害、願望、不満などを表すからでもある。しかしまた『人間喜劇』のような巨大な作品群によって社会全体を表現するためには、固有名詞を持つ登場人物だけでなく、その他大勢、名前のわからない集合体としての人々の言説を作品に取り込む必要があったにちがいない。一般に小説の中には、語り手の言葉や、個人として現れる登場人物の言葉、またその背後にある、同時代人や社会集団に共有された紋切り型、あるいはここで問題にするような噂の言説など、異なった種類の言葉が存在する。それらは互いに密接かつ複雑な関係を結んでいる。その意味で作家の仕事には、作曲家が様々なモチーフやメロディーを組み合わせ、多数の楽器にそれらを受け持たせて一つの作品を形作ってゆく、その仕事と似通ったところがあるかも知れない。ここでは特に「cancan」と呼ばれる集団の言説に焦点を当て、この言葉が音楽の比喻を伴って最も集中的に用いられているバルザックの中編小説『老嬢』を分析してみようとする。出自の異なる言説が互いにどのように作用し合って作品を支えているか、噂の言説を小説に組み込む際、作家がどのような「音楽的」技法を駆使しているかを明らかにした上で、噂が語るものを読み解いてみたい。

1. «cancan» という言葉

集団によって行われる会話を表す言葉は、バルザックの作品の中でも«bruit», «rumeur», «cancan», «commérage», «médisance», «calomnie» など様々である。それぞれの言葉が指し示すものは部分的に重なり合っているが、言葉によって集団の会話のどの側面に焦点を当てるかがしばしば異なるのは当然だろう。会話の性格を浮き彫りにするために多く使われる言葉がある。例えば «médisance» (悪口), «calomnie» (中傷) などは、会話に込められた悪意や、人を貶めようという意図を示すために用いられることが多い。また、情報の伝わり方に焦点を当てたい時に頻繁に使われる言葉もある。「bruit」という言葉は、«le bruit court» (噂が流れる) や «le grand bruit» (大きな噂) といった『人間喜劇』に頻出する表現が示すように、噂がすばやく広まる様子や、ある知らせの反響の大きさを表すためによく用いられる。

バルザック作品において多用され、特に『老嬢』(*La Vieille Fille*) に登場回数の多い «cancan» という言葉は、19世紀ラルース百科事典によれば «canard» (アヒル) という言葉から派生しており、その単調で耳障りな鳴き声を思い出させるという。そこには、鳥類の鳴き声を解析できない多くの聞き手にとって意味の不明瞭なアヒルの声の名残が聞こえるかもしれない。つまり «cancan» という言葉は、音としてはかなりうるさく存在感があるけれども、意味が必ずしも明晰でない言説を思い起こさせる。そのためか «cancan» はバルザック作品の中でも、知的な論理性を欠いた耳障りなおしゃべりを意味することがしばしばある。例えば『従兄ポンス』の中で門番夫人シボが延々と繰り返す噂話が、何度も «cancan» という言葉で表されている。

しかし単なる鳥の鳴き声と異なり、「cancan」も人間社会では必ずしも単なる騒音には終わらず、終いには個人の生活を変えるような力を持ちうることに注目したのがバルザックだった。『従兄ポンス』でも、シボ夫人のおしゃべりは決して無邪気なものではなく、ポンスの命とコレクションを奪う計画に貢献

する。しかも **«cancan»** は、バルザック小説の中で必ずしも鳥の鳴き声のように無秩序なわけでも、非音楽的なわけでもなく、ある秩序と展開を持ったおしゃべりでありうるものが、特に『老嬢』で明確に示されているように思う。

『老嬢』には裕福な四十女コルモン嬢との結婚を望む三人の男性、すなわち、アンシアン・レジームの生き残りヴァロワ騎士、時代に合わせて変貌する自由派デュ・ブスキエ、知的な野心を持ちながら行動力と財力を欠く青年アタナーズ・グランソンが登場する。以下、コルモン嬢との結婚、政治的文脈の両面に対立関係にあるヴァロワ騎士とデュ・ブスキエにまつわる噂を取り上げ、小説がどのように集団の会話の展開を描いているかを具体的に探してみたい。

2. 二人の「煽動者」とその敵対関係

『老嬢』では作品冒頭からアランソンの噂話が問題になっている。ヴァロワ騎士は町の噂を把握し、これをコルモン嬢との結婚計画に役立てようとしている。騎士はラルド女将の経営する洗濯屋の二階に住んでいるのだが、この洗濯屋で働くグリゼットたちは、毎朝彼に「アランソンの町の噂話」を語りに来る。

彼は洗濯女たちが家庭の中でかぎつけてくる秘密を教えてもらうのが好きだった。そこでこの子たちは毎朝、アランソンの噂話（**cancans**）を彼に語りにやってきた。騎士は彼女たちを、ベチコートをはいた私の新聞、生きた新聞小説などと呼んでいた。サルティエヌ氏⁽¹⁾でもこんなに優秀で安上がりな、しかも精神的にこれほどずるいことをやってのけながら、表向きは名誉を保てる密偵を使ったことはなかっただろう⁽²⁾。

ここで「アランソンの噂話」と呼ばれているものは、洗濯屋で働く女の子たちが仕事上の立場を利用し、各家庭の内部に視線を滑り込ませて獲得した情報である。それは私生活の秘密を暴く種類のものであるため、ヴァロワ騎士の単

調な生活を楽しませるだけでなく、他者の行動を知り、自分の出方を計算するために大変有用だ。「密偵」たちの視点はまた、小説が私生活の内部を描き出すために必要としているものでもある。ここでは秘密が噂話（cancan）というかたちで家庭の外に漏れ出た後、物語内の情報網の中枢にいる人物を経て、読者に伝えられる。そのため噂は、物語世界内の人物と小説読者に対して二重の働きを持ちうる。例えば、登場人物はこうした情報を用い、他の人物に影響をもたらすことができる。他方、小説読者は噂によって登場人物たちの隠された側面を発見することがあるばかりでなく、噂の流通のあり方から、噂する人物と噂される人物の関係についても何かを知ることになる。

『老嬢』の物語世界で噂を司ろうとするのは、こうして作品冒頭から示されているように特にヴァロワ騎士であり、社会学の噂研究においてはこのような人物を「煽動者」（instigateur）と呼ぶことがある。ところが、実際にはデュ・ブスキエも、町の噂を用いてヴァロワ騎士を貶めようとしている。ヴァロワ騎士がかつて密かにセザリーヌという女性と結婚して子供まで生ませていたという噂を、デュ・ブスキエは具体的な情報をつけ加えて肯定してみせたことがあった。デュ・ブスキエは騎士の放蕩生活と隠された女性関係を中傷によって暴き、相手を陥れようとしていたわけである。従ってこの二人は共に、相手に関する噂の「煽動者」であることが注目される。

このような互いの噂についての「煽動者」たる二人の人物の関係は、二種類の対立をはらんでいる。まずは明らかに、裕福な四十女コルモン嬢と結婚したいという希望のために、騎士とデュ・ブスキエは敵対している。さらに、時代の趨勢に合わせて信条を変えることも恐れず、王政復古下では王党派の皮をかぶった共和派と噂され周囲を煙に巻いているデュ・ブスキエと、アンシアン・レジームの生き残りであり、「貴族階級の荘重な残骸」と形容されるヴァロワ騎士は、各々が担う価値と政治的・宗教的信条によって対立する存在である。どちらがコルモン嬢と結婚して巨額の財産とアランソンの町における主導権を手にするかという問題は、フランス全体の政治的運命をその部分単位から暗示している。したがって、噂による彼らの鞘当ては、単なる個人的攻撃や暇つぶ

しの域を越えたものとなるはずなのである。

ところが、二人のライヴァルが結婚問題のために噂を利用しようとする時、そこには非常にバルザック的な障害が待ち構えている。つまり、噂の流し手と聞き手が同じ価値観や読解のコードを共有しないために、「扇動者」が期待したような効果を噂が発揮しない、といった種類の障害である。例えばヴァロワ騎士は過去に懲りて、コルモン嬢と結婚するために今や噂の制御に細心の注意を払っていた。洗濯屋の二階に住み、若き女性たちと怪しげな密会をしているにも関わらず、清廉潔白な騎士としての噂を洗濯女たちに広めさせることに成功していた。ところが彼の意に反して、このような状況は結婚計画に不利に働く。なぜなら、男性というものを知らぬコルモン嬢は、相手は少し身持ちの悪い、経験豊富な人の方がよいと密かに望んでいたからである。コルモン嬢がヴァロワ騎士の噂について慧眼さに欠ける読み手であるのはもちろんだが、ヴァロワ騎士が自分についての噂を管理する方法を読み間違っていることもまた、読者だけが知っている事実なのだ。

ヴァロワ騎士とデュ・ブスキエの人物像、それが象徴的に示す階級と価値観の違いは、彼らの行動様式にも表れ、噂への対応とも関わって結婚問題を左右する。ヴァロワ騎士は、コルモン嬢と自分との結婚の噂を故意に流し、それによって相手が自分と結婚せざるを得ない状況を作り出そうという計画を持っていながら、じっくりと策を練り、優雅に実行しようとする性向のために、噂を発表するタイミングを逃してしまう。このような間接的行動においてだけでなく、直接的行動においても、騎士は敵デュ・ブスキエの持てる敏捷さ、厚かましさを欠いている。コルモン嬢が実は既婚者である亡命貴族トレヴィル氏と結婚できると勘違いし、大騒動を巻き起こした挙げ句に事実を知って町中の笑い者となった時、デュ・ブスキエはなりふりかまわず駆けつけて彼女に求婚する。そして、半年前から彼と婚約していたという嘘で世間体を取り繕おうとしたコルモン嬢に同意し、その夫になってしまう。新しい時代を特徴づけるこのような功利的性急さと反対に、求婚に行くために化粧に時間を費やし、遅れを取ったヴァロワ騎士は、雅びを重んじる過去の風習を担いつつ敗北せざるを得

ないのである。

噂という間接的な情報伝達媒体に密かに込められたメッセージがその「扇動者」の意図どおりに解されないというのは、現実の中で頻繁に観察される「事実」でもあろう。バルザックがこうした「事実」を描こうとしたと考えることも、もちろん可能である。ただし、ここではコルモン嬢の読み違いが、ヴァロワ騎士という旧体制の生き残りの死を招くことが重要である。がさつで行動力に富んだ男デュ・ブスキエが財力と政治力を掌握し、ヴァロワ騎士が噂という間接的手段を悠長にもてあそびながら、結局は自らの評判を立て直すことができずシャルル 10 世の亡命と同時に死んでゆくという物語は、単なる政治的寓話ではないに違いない。バルザックにとって、コミュニケーション様式の変化は政治的動向と切り離しがたいものなのであり、1830 年という年は、噂のあり方にとっても転換の時なのである。噂についての読み違いは、バルザックがある「過去」に存在したとみなすような、互いの意図が透明に理解される融和的世界が、この境界の年を経てさらに遠のくことをも予言しているだろう。

3. 噂話 (cancan) のオーケストレーション

ある区切りを前にして最後の輝きを見せるかのように、『老嬢』の中で噂話は華々しく、ある意味で古風な姿を披露する。ヴァロワ騎士が煽動し、デュ・ブスキエを槍玉にあげる噂は、コルモン嬢に理解されず、その意味で効果を発揮しないとはいえ、作品の重要な主題を担っている。この噂の具体的な内容は、アランソンの町の洗濯屋で働く若い娘の一人シュザンヌがデュ・ブスキエによって妊娠させられたというものだった。噂の語るところは、事実ではない。洗濯女で終わるにはあまりに美しいシュザンヌはパリに上りたいがために妊娠したと嘘をつき、男性からお金を騙し取って資金にしようと考えたのだった。シュザンヌは初めヴァロワ騎士に罫をかけに行ったものの、一目でこの嘘を見破られ、騎士にけしかけられてデュ・ブスキエのところへ赴く。デュ・ブスキエは自分に責任がないことを感じながらもスキャンダルを恐れてしぶしぶ

彼女に金を渡す。その額が予想より少なかったことにシュザンヌは憤り、デュ・ブスキエが財産目当てで熱望しているコルモン嬢との結婚を不可能にするために、彼のせいで妊娠したという噂をばらまくことにしたのだった。

噂が町に広まったその日の夕べ、コルモン嬢の夕食会で、会食者たちは熱心に噂話を奏でることになる。ここでは「cancan」が、アヒルが発する（人間にとっては）意味をなさない音のように無秩序なままに終わってはならず、一つの芸術作品のように組み立てられねばならないことが強調されている。素朴で正統な噂話の伝統が披露されねばならない。「地方の町の人々は、噂話（cancans）を蒸留する技を極めている」⁽³⁾と『老嬢』の語り手は述べる。つまり噂話を組み立てる集団の構成員たちは、すでになりに熟練した技を持っているのだが、時と言葉を注意深く選んでそのパフォーマンスをさらに完璧なものにしようとしているのだ。「cancan」という言葉の擬声語的な響きが特に強調するのは、このような集団的言語活動が持つ、音と意味をめぐる気晴らし（divertissement）という性格である。互いの呼吸を読む技と参加者の協力によって、噂話の素晴らしい楽しみが生まれるのであり、それは楽器のアンサンブルの楽しみに非常に近いものとなる。コルモン嬢の夕食で噂話が展開してゆく様子を描くために、語り手はふんだんに音楽の比喩を用いている。

この奇妙な事件について語り合うべき時はまだ来ておらず、それぞれが弦の調子を整えておく必要があった。（中略）それは噂話の「弱音」（*piano*）の段階だったが、一皿目の前菜をみんなが食べ始めようという時に、噂話は次第に強く（*rinforzando*）響き出した。（中略）そこで噂話のフォルテが始まった。デュ・ブスキエは独り者のジゴーニュ親父⁽⁴⁾という役柄のもとに描き出された。この種のオーケストラの指揮者としては最高に腕前の良いヴァロワ騎士に率いられ、この噂話の序曲はすばらしく奏でられた⁽⁵⁾。

ここで噂話（cancan）は、序曲を備えており、その序曲の中にも強弱の変

化によって互いに区別される複数の局面が存在するような、確固たる構成を持った音楽作品に喩えられている。バルザックは音楽の比喩を続け、ヴァロワ騎士の役割を「指揮者」のそれに喩えている。彼がオーケストラにデュ・ブスキエの不道徳性を大々的に歌い上げさせ、コルモン嬢の結婚相手候補として失格させようという意図を持っていることが、この「指揮者」(chef d'orchestre)という言葉によって強調されている。つまり「指揮者」は「煽動者」(instigateur)という言葉が示していた役割の、一つの側面であり解釈なのである。ヴァロワ騎士という少し滑稽になってしまっているが、古き良き時代のエレガンスの生き証人である人物が、集団の会話を芸術的観点から見て完成度の高いパフォーマンスにまとめあげる技を体現していることが注目されよう。

ところで、弱音から強音へと展開してゆく音楽に噂話の発展を喩える手法は、『老嬢』の翌年に発表された『ニュシングン商会』でも使われている。以下の引用部分で、登場人物ビジウは1836年の時点から7月革命前の1825年における株式取引の状況を振り返り、そこで噂というものがどのような経過をたどって投機に重要な影響を与えていたかを語っている。

クチュールも言うように、うまみのある株式取引というのは実に素朴なやり方で公布され、老練な連中の(中略)交際関係に支えられて、静かに、証券取引所の暗い片隅で、こそこそと行われていた。ヤマネコどもは、金融的な意味で、あの『セビリアの理髪師』の中傷の歌を演奏していたと言っている。彼らは最初、ピアノで、ピアノで(そっとそっと)始め、その事業の健全さについてちょっとした陰口を言い、それが耳から耳へと伝わってゆく。彼らはその客を、つまりは株主を、こんなふうに巧妙に作り出された噂によって、自宅か証券取引所か、あるいは社交界の中だけで開拓する。しかしその噂はしだいに大きくなって、ついには四桁相場という全体奏(tutti)にまで高まってゆくんだ…⁽⁶⁾

ここでは、自宅や証券取引所、社交界といった場所から始まり、次第にあらゆ

る人々を巻き込んで噂が株式相場を左右してゆく様子が描かれ、その噂の高まりは、音楽的なクレッシェンドに喩えられている。ボーマルシェの戯曲『セヴィリアの理髪師』への言及があることも注目される。思い出しておきたいが、この戯曲で、後見している若い娘ロジヌと強引に結婚しようとしている老医師バジールは、変装して現れた若きアルマヴィヴァ伯爵にロジヌを奪われそうになる。その時、音楽教師バルトローは、中傷の力でアルマヴィヴァをけなし、町から追い払ったらよいと忠告するのだった。『ニュシンゲン商会』では噂によって株の値を左右する方法が語られているなら、『老嬢』でも噂によってデュ・ブスキエの評判を一気に落とし、コルモン嬢の結婚相手候補の地位から追い落とそうという計画が目論まれている。その意味で『セヴィリアの理髪師』の、噂の影響力を使って利益を計るという文脈は、忠実に踏まえられていると言えよう。

しかし、さらに重要な点を忘れてはならない。バルザックは『ニュシンゲン商会』と『老嬢』の両作品において、集団の会話がしだいに高まってゆく様子を、『セヴィリアの理髪師』の〈中傷の歌〉の構成を踏まえて音楽的に喚起しようとしているように思われる。これを理解するためには、まずボーマルシェ『セヴィリアの理髪師』の第2幕8景作品で問題の噂のクレッシェンドがどのように描かれているかを見なければならぬ。

まずはかすかな音が、嵐の前のつばめのように地面すれすれに、ピアノシモでささやきながら、流れ、道々毒矢を播いてゆきます。誰かの口がそれを受け取り、ピアノで、ピアノで（そっとそっと）、人々の耳に巧みに流し込むのです。これでもう災いは根を下ろしたのです。やがて芽を出し、這い、歩きます。そして、「次第に強く」(*rinforzando*)、口から口へとのすごい勢いで伝わってゆきます。それから突如、どういうぐあいにだか、中傷が立ち上がり、うなり、膨張し、見るまに大きくなってゆきます。それは突進し、さらに遠くへ飛んでゆき、渦を巻き、抱き込み、根こそぎにし、引きずり、爆発し、雷鳴となり、はてはめでたく全体の叫び、

大衆の「クレッシェンド」、憎しみと排除を歌う総員の「合唱」となるのです。どんな人間が抵抗することができましょう？⁽⁷⁾

ピアノからフォルテへと強まって次第に多くの人間を巻き込んでゆく流言の発展、成長が、このテキストからすでに非常によく想像できる。それは一種の怪物の成長を思わせる点で、ウェルギリウスによる「噂」(Fama)の描写を思い起こさせもする⁽⁸⁾。しかしポーマルシェのテキストに、弱音からすばらしいクレッシェンドを経てフォルティッシモへと至る印象的な音楽的実現を与えたのは、作曲家ロッシーニだった。ロッシーニのオペラ『セヴィリアの理髪師』は、フランスでは1819年秋にイタリア座で初演されている。このオペラのバジーリオのアリア「中傷とはそよ風のようなもの」(バルザックが〈中傷の歌〉と呼んでいるもの)では、高まってゆく噂の脅威、誰にも止める事のできないその発展と影響力が、オーケストラのクレッシェンドと言語表現の融和によって見事に表現されている。

音楽的な表現を得ることによって〈中傷の歌〉のクレッシェンド効果はますます鮮烈なものとなり、特に噂の発展と爆発の比喩として、バルザックの脳裏に強く焼き付いたものと思われる。『ニュシンゲン商会』、『老嬢』では共に、ロッシーニの音楽がバルザックのテキストを陰で支えていると言えよう。個人には制御できない噂の成長と脅威が、作者と読者に共有されるべき音楽的記憶に基づいて表現されている。言い換えれば、読者は噂の発展を『セヴィリアの理髪師』の〈中傷の歌〉を心の中で聴きつつ想像することを期待されているのであり、それが実現した時、ポーマルシェのテキスト、ロッシーニの音楽、バルザックの作品が重なり合って生まれる重層的な、間作品的な噂の共鳴が生まれるはずである。

以上から、バルザックが噂話を描く時、登場人物たちが語る言葉を、時間の中でボリュームもニュアンスも変化する音の構築物として捉えていることが理解される。作者はこれらの会話を全体として聞くことのできる位置を想定し、一つの音楽作品を捉える視野を持って集団の言語活動を捉えている。さらには

噂話の展開と具体的な音楽作品の記憶を重ね合わせるにより、小説の読者が、集団の会話が作る響きの圧倒的な盛り上がり、あらゆる人間を巻き込む影響力を、聴覚的な想像力を動員して「読む」ことができるよう、目論まれていると言えるのではないだろうか。

『セヴィリアの理髪師』では、噂が驚異的威力に育つ可能性のみが語られていた。『老嬢』でも噂話は結局、デュ・ブスキエを失墜させるほどの影響力を持つことはない。ヴァロワ騎士を芸術的な指導者とし、古風でどこか優雅さを保った「cancan」の演奏を披露することが重要なのだとも言えよう。しかし18世紀のボーマルシュの作品とは異なり、『老嬢』での噂話が具体的な社会状況に支えられて発展する点は注目に値するだろう。デュ・ブスキエについての否定的な噂のクレシェンドは、時代に合わせて主義主張を変える変節漢の代表とも言える人物への人々の不信に支えられている。また彼が近い将来において体现することになる新しい体制への不安に満ちた予感も、迂回したかたちで噂の原動力となるのである。このような点に、社会的・歴史的観察を基礎としたバルザック小説の特色、及び19世紀になって社会情勢の鏡としての役割を強めていった噂の姿を見て取ることはあながち無理ではないだろう。

4. 噂の言葉——同一要素の繰り返しによるクレッシェンド

上で見たオーケストラによるクレッシェンドの比喩は、人間集団の声を楽器の全体的な響きに喩え、顔の見えない匿名の人間の集合と化した噂の語り手たちの声の脅威を、オーケストラの音の一丸性によって表している。それは、小説が実際に読者の聴覚に訴えて噂の高まりを表現することができないという欠点を補うための一策とも考えられる。ただし、小説は噂の言葉を引用するために様々な方法を駆使し、噂する人々の声を音楽作品とは違った方法で聞かせることもできる。例えば、集団全体が語る様子を描きながら、同時にその中で噂を語る個人の言葉使いなど細かい点に光を当てられるという利点もあるのだ。噂する人々の言葉を拾って小説の中に記す巧みな技が発揮されている箇所を、

一つ見てみたい。「cancan」のフォルテが始まり、さらにそれが葡萄酒の効果で高まっていった時、デュ・ブスキエに対する悪口は、「père」（父）という言葉をめぐる、同音異義語による言葉遊び（calembour）というかたちで最高潮に達する。これは、もとのフランス語文でないと理解が難しいが、以下に原文と試訳を掲げてみる。

Ainsi du Bousquier était un père sévère, — un père manant, — un père sifflé, — un père vert, — un père rond, — un père foré, — un père dû, — un père sicaire. — Il n'était ni père, ni maire ; ni un révérend père ; il jouait à pair ou non ; ce n'était pas non plus un père conscrit. «Ce n'est toujours pas un père nourricier, dit l'abbé de Sponde avec une gravité qui arrêta le rire.

— Ni un père noble», reprit le chevalier de Valois.

L'Église et la Noblesse étaient descendues dans l'arène du calembour en conservant toute leur dignité.⁽⁹⁾

こうしてデュ・ブスキエは、〈根気強い〉頑固親父、〈いつも〉がさつな平民おやじ、〈皮肉な〉野次られおやじ、〈背徳的な〉ひひおやじ、〈三段腹の〉でぶ親父、穴あきおやじ、〈墮落した〉、ならざるを得なくしてなった親父、〈ハルタデみたい〉な刺客おやじ、なのだった。彼は父親でも母親＝市長でもなかった。彼は尊敬すべき司祭〈父〉さまでもなかった。彼は丁半の〈父であるか否かの〉ばくちを打っていた。元老院議員〈徴兵された父〉でもなかった。

「結局、育ての父ではありませんな」と、スpond神父が皆の笑いを止める重々しい調子で言った。

「芝居の老け役〈気高い父〉でもありません」とヴァロワ騎士が応じた。教会と貴族階級が、完全にその威厳を保ちつつ、駄洒落の闘技場に降り立ったのである。

この部分の前半では、引用された言葉それぞれの発話者が誰であるかは示されず、噂の奏で手たちは集団の中に没して匿名になる。その代わり、小説のテキストの中には「*père*」をめぐる短い言葉の並列によって、たたみかけるようなリズムが生まれる。作曲技術において、あるテーマ内の一要素だけを取り出してそれを何度も繰り返すことが、一種の高揚を作り出すのと似ていないだろうか。また小説全体を見渡せる位置にいる読者はここに、あるテーマをめぐる皮肉のクレッシェンドを聞くこともできるだろう。噂では、デュ・ブスキエがシュザンヌだけでなく様々な女性をだまし、多くの私生児を作ったということになっている。つまり、噂の語り手たちは「*père*」という言葉を繰り返すことでデュ・ブスキエの不道德な行いの結果を表現しようとしている。しかし、デュ・ブスキエには子供を作ることなどできないということが、やがて物語の中で暴かれるだろう。この事実と噂の乖離は、噂が盛り上がるにつれ、それを知る読者にとって痛烈な皮肉をはらむことになる。

上のように集団の言葉を収録する方法は、オペラで複数の登場人物が同時に舞台に立っている時、それぞれの台詞を順番に際立たせる手法とも似通っている。しかしオペラと違って小説では、このように台詞を並列する書き方をした場合、駄洒落を口にする発話者たちを個人として識別できない。小説家は、その点を活用している。匿名の語り手たちの駄洒落を並べて文章のテンポを加速したところで、バルザックはスポンド神父とヴァロワ騎士の台詞だけを、発話者を特定した上で引用している。その結果、スポンド神父とヴァロワ騎士の発言は突然ゆっくりになった重々しいリズムで強調され、さらに発話者の立場と発話内容の関係も浮き彫りにされることになる。スポンド神父は教会、ヴァロワ騎士は貴族階級を代表してデュ・ブスキエと対立し、それぞれの見地からデュ・ブスキエにおける「父性」の墮落を非難している。スポンド神父は「*nourricier*」（恵みをもたらす）存在でありえないデュ・ブスキエの存在を「*père nourricier*」（育ての父）でないとして暗に非難する。貴族の代表ヴァロワ騎士はデュ・ブスキエの貴族的（*noble*）でも高貴（*noble*）でもない現実の姿を「*père noble*」（芝居の老け役）でないという表現を通して皮肉る。バルザック

作品中でカトリック教と貴族階級が「父性」(paternité)の概念の重要な構成要素となっていることを考えれば、作者がそれらを代表する人物の発言だけをクローズアップし、宗教と貴族社会の破壊者として描かれるデュ・ブスキエの存在しない「父性」を彼らに非難させていることは、極めて意味深い。

5. 噂の変奏・フーガ的構成

コルモン嬢の夕食における「cancan」の演奏の翌日、『老嬢』のクライマックスを作る噂は、コルモン嬢結婚の噂である。ロシアから帰還したトレヴィル子爵なる人物がコルモン嬢の家に宿泊し、彼女と結婚することになったという知らせは、素早くアランソン中に広まる。噂の言葉にしばしば見られる一つの特徴が、この場面に取り入れられている。それはある主題をめぐり、噂が好んで変奏を繰り返すということである。トレヴィル子爵の財産と前歴についての噂は、それを語る社会階級によって内容が異なり、各階級にとって彼とコルモン嬢の結婚が有利か不利かという利益問題を反映している。さらに、コルモン嬢の召使いが町の家具屋に探しに行ったベッドのことが問題になり、噂される場所によって、寝台の大きさはかなり変化する。その大きさを強調してコルモン嬢が結婚にかける期待をからかう人々がいるかと思えば、デュ・ブスキエが居合わせた裁判長の家でのように、夫婦生活を象徴するような寝台の大きさを否定しようとする動きもある。後者のように、個人的な利害が噂の変奏の内容に反映されることもあるが、寝台の大きさを誇張する人々は主に、噂の主題のきわどく滑稽な部分を取り出し、それについて変奏を繰り返すことで楽しみを見出し出しているようだ。そもそも、コルモン嬢のなかなか実現しない結婚に関する噂にはこうした小さな変奏が多く見られ、それは町の人々が抱く彼女への関心や、悪意のないからかい、親愛の情などを表現していると考えられる。

このように、噂の内容は終始変わらず単一であるとは限らない。それはしばしば分裂し、変奏される。あるいは、対立する二つの噂が生まれることもある。ただし、デュ・ブスキエについての噂では、コルモン嬢の宴会で噂話の演

奏者たちが盛大に歌い上げた「デュ・ブスキエの生殖力 (fécondité)」というテーマが優勢である。だが、これと真っ向から対立する「デュ・ブスキエの不毛性 (stérilité)」というテーマも小説の中に存在しないわけではない。そのため、ここでは噂内部での単なる主題の変奏ではなく、二つの主題が異なった声部に代わるがわる現れて絡み合うフーガ的な構成が、小説全体を通して見られるのではないかと考えられる。

「デュ・ブスキエの生殖力」という主題は、表層的なデュ・ブスキエの外見とも対応して物語の中で重要な意味を持つ。語り手はコルモン嬢の密かな考えを読者に暴露し、「口に出す事はできなかったが、彼女は共和主義者のヘラクレス的な外見に惹かれていたのだ⁽¹⁰⁾」と述べている。つまりコルモン嬢は、デュ・ブスキエの外面から男性的エネルギーの豊かさという印を読み取り、それに密かに魅力を感じていたわけだ。「デュ・ブスキエの生殖力」という主題を繰り返す噂は、この誤った読みを小説の中でさらに前面に押し出すことに貢献していると言えるだろう。これは、ヴァロワ騎士が実際には女好きであるのに、自分のアヴァンチュールについての噂を封じ込めてしまったため、コルモン嬢の彼に対する関心が薄らいでしまうのと対照的である。

「デュ・ブスキエの生殖力」というテーマと相対するテーマは、これに対して目立たない位置にあるが、物語の冒頭から密かに提示されている。まず語り手がデュ・ブスキエの人物を描く時、矛盾する二つの側面を指摘している。デュ・ブスキエの身体には確かに好色漢的なふくらはぎ、厚い胸板、豊かな筋肉など男性的生命力を象徴するような要素が見られるのに反し、声がそれと釣り合わない貧しさなのだ。「〔彼は〕筋肉に釣り合う声を持っていなかった⁽¹¹⁾」と語り手は指摘し、その声が「消耗し切った投機師の声⁽¹²⁾」であると述べている。つまり、デュ・ブスキエの体格が今なお男性的であるなら、その声はかつての放蕩による消耗を原因とする不毛性を暴いている。これも、ヴァロワ騎士が痩せていながら、豊かなよく響く声を持っているのと対照的である。バルザック小説において、身体的特徴が精神的特徴と深く結びついていることは言うまでもない。

また、小説冒頭でシュザンヌが妊娠したという偽の情報をデュ・ブスキエに告げに行った時、利己的な発言を聞かされて、シュザンヌは彼を罵倒していた。

「よばよばの怪物め！あんたなんか絶対父親になれないから！」とシュザンヌは不吉な予言の調子を込めて言った。⁽¹³⁾

偽の妊娠の噂、そこに込められた「デュ・ブスキエの生殖力」という主題と前後するかたちで、「デュ・ブスキエの不毛性」という、もう一つの主題が登場人物シュザンヌの声によって提示されていることがわかる。この二つの相反する主題は、フーガにおける主題と対主題のように、噂も含めた異なった声部によって相次いで歌われ、互いに組み合わせられて小説のポリフォニーを編んでゆく。しかも上の場合のように、読者がデュ・ブスキエは本当に父でありうるのだろうかと考えながら「デュ・ブスキエの生殖力」のテーマの名残を聴いているうちに、別の主題（「デュ・ブスキエは父でありえない」）の冒頭が聞こえて来る場合、ストレット（*stretto*）と呼ばれるフーガの手法と同じく、そこにはある緊張感が生まれる。ストレットとは、フーガの中で、主題とその応答、またテーマの模倣（楽句の反復等）が、一つが終わらないうちに次が始まるというようにして重なり合うものである。先に指摘したように、「*père*」をめぐる駄洒落には、音楽的主題の一部分を取り、それを繰り返して構造的なクレッシェンドを作る手法に似通ったところがあった。ここでもまた、テーマや具体的な言語表現をめぐる重層的展開によって、小説の中に緊張と高揚が生み出されていると言えるだろう。

6. デクレッシェンド——「*cancan*」の時代の終焉

小説の中心部で、噂話の奏で手たちが「デュ・ブスキエの生殖力」なるテーマを華やかに奏することはすでに見たとおりだが、デュ・ブスキエをめぐるこ

の二つのテーマに、小説はどのような解決を与えるのか。コルモン嬢とデュ・ブスキエの結婚後、子供ができない理由について町の人々は話し合うが、コルモン嬢の無知とデュ・ブスキエのえせ信心家的な行動のために、噂は結婚の本当の意図と、家庭生活の秘密を言い当てることができない。実際のところ、デュ・ブスキエは女性としてのコルモン嬢と結婚したのではなく、彼女の財産と結婚しただけだった。すると、ここでもソロの歌い手として現れるシュザンヌが「デュ・ブスキエ夫人はいつまでもコルモン嬢でいるしかない」と述べ、再び「デュ・ブスキエの不毛性」のテーマを一声歌ってゆく。ヴァロワ騎士はついにはコルモン嬢から家庭の内情を聞き出す事に成功し、それを町に広める。結婚計画が失敗して一気に老けてしまった騎士が最後の力をふりしぼって崩り立てたこの噂は、「デュ・ブスキエの不毛性」のテーマをついに集団の声によって歌い上げることを成功させ、しばらくの間、デュ・ブスキエをおぞましく滑稽な人物に仕立てあげる。ところが、なぜか滑稽さというトーンは終いに薄れ、噂は下火になってゆくのだった。

こうして、コルモン嬢の夕食で *«père»* という言葉を投げ交わしながら芸術的な喜びを込めて「デュ・ブスキエの不道德な生殖力」という主題を歌った町の噂は、作品の最後で再び指揮を取るヴァロワ騎士に促され、その対主題「デュ・ブスキエのおぞましく、滑稽な不毛性」をしばらく歌った後、それにも飽きて消えてゆくのである。『老嬢』の音楽的な構成において、噂はコルモン嬢の夕食会、及び彼女のトレヴィル氏との結婚計画とその失敗においてフォルティッシモを極めた後、次第にデクレッシェンドし、弱音になり消えてゆくと言える。これは7月王政が近づくにつれ、騎士の代表する階級が力を失い、デュ・ブスキエの代表する階級が台頭してゆく社会的動きとも一致している。

物語世界において噂する集団は、複数の主題を歌いながらも、それについて解釈を深め、自分たちの属する社会の未来をそこに読むようなことはない。その分、「デュ・ブスキエの不毛性」という主題は、小説読者に対してメッセージを発することになる。古い伝統と歴史的価値を持つ建造物を作り替え、パリから物を導入して地方の風物を消し去ってゆく彼の行為が象徴するように、デ

ユ・ブスキエのエネルギーは優雅な古い時代の息吹や田舎町の経済的自立を最終的に窒息させる不毛な推進力であることが、ここでは主張されている。小説末尾で語り手が指摘しているように、彼はオランダと同じく「すべてを破壊しながら何も生み出せない、無秩序で、怒り狂った、無力な革命の神話⁽¹⁴⁾」を体現させられている。この殺伐たる推進力＝破壊力と、「何も生み出せない不毛性」のテーマは、噂の語り手たちは理解していないが、小説の中で通底しているのである。つまり、バルザックにとって7月革命が大革命よりも決定的にするであろう歴史的変化の一側面を、「デュ・ブスキエの不毛性」という主題が表現していると考えねばなるまい。さらに付け加えれば、「デュ・ブスキエの不毛性」のテーマは、旧体制の優美とギャラントリーの残滓であるヴァロワ騎士をめぐる現れるテーマ「ヴァロワ騎士の色好み」とも対をなしている。「ヴァロワ騎士の色好み」というノスタルジックなテーマはまた、これを否定する噂が歌う「ヴァロワ騎士の清廉潔白さ」という偽のテーマと対照的な響きを聞かせる。これら複数のテーマは、互いに呼応しあって、作品を貫いているのである。

付け加えれば、ヴァロワ騎士の噂による最後の攻撃に対して、デュ・ブスキエは中傷による致命的な仕返しをしている。実際には無一文だった騎士は、アランソンで各家庭を回り、賭け事でお金を貯めるという寄生虫的な生活をしてきた。彼は世間に対し、かつて親友プルボントン侯爵が亡命した時に貸した**1200**ピストルを返してもらい、それで生活していると標榜していた。そこでデュ・ブスキエは、新聞にプルボントンの存在を証明できるものには千フランの年金証書を贈呈するという広告を載せ、ヴァロワ騎士の怪しげな生活基盤を明るみに出して彼に決定的な打撃を与える。騎士の経済的基盤を問う噂は、騎士が代表する階級の王政復古下における財政状態の危うさを比喩的に指し示し、今や崩れ去ろうとしている体制の空虚な内実を暴いている。また、新聞という大衆を巻き込む間接的媒体を使って噂を広める間接的方法は、会食において「cancan」を歌い上げるという素朴で直接的な噂の高揚と対照的であり、デュ・ブスキエが体現する新しい7月の体制、そこで到来するメディアの黎明

期にふさわしいものと言えるだろう。音楽的な融和を楽しむこともできた「cancan」の時代は、ヴァロワ騎士の死、王政復古の終焉とともに終わるのである。

終 わ り に

『老嬢』は王政復古下の地方都市における貴族階級と自由派の敵対関係を描いた、ある意味で風刺的・寓話的な小説である。このような作品の中で、噂は主要登場人物の私生活の秘密やその経済的・政治的野心をさぐる鍵となるだけではない。噂は各人物が代表する階級の現状を、作者が標榜しようとしている政治的姿勢を反映しながら、迂回したかたちで表現している。デュ・ブスキエが代表する勢力の破壊力と不毛性、ヴァロワ騎士が代表する貴族階級の経済的基盤の怪しさなどの社会的現実が個人の生活の中に象徴的にはめ込まれ、さらには、それについて噂する人々の会話に投影されて、クローズアップされる仕組みが見られる。集団の会話の主題は、小説を作る複数の「声」に受け継がれ、フーガの主題のように歌われたり、変奏を伴って奏でられたりし、人物や、彼らが象徴する価値を多面的に照らし出す。そして、噂を広める方法や技法にも、人物たちが体现し、時代によって移り変わるコミュニケーションのあり方が刻み込まれているを見た。

初期のバルザック小説はしばしば、ある人物についての噂を、謎や隠された真実を探索する糸口として活用していた。しかし作家は次第に、複数の人物についての噂・語り手の言説・登場人物のコメントなどを組み合わせた多声的な構成を用いるようになってゆく。後期の作品は、さらに数多くの登場人物について個別に噂を展開しながらも、全体として壮大なポリフォニーを生み出すことがあるだろう。こうした多層的な音楽によってバルザックが描く「現実」は、複数のフーガをはらむような奇妙な炸裂を見せながらも、それゆえにますます複雑かつ豊かな和声を聴かせてゆくのである。

註

- (1) **Antoine Gabriel de Sartine (1729–1801)**. フランスの政治家。**1759–1774**年には、警察代理官としてパリの町の衛生化や街灯設置などに尽力した。
- (2) *La Vieille Fille*, t. IV, p. 822. (バルザック『人間喜劇』からの引用は、すべて次の版から行ったものを原則として日本語訳して本文内に記す。引用箇所については、註にこの叢書の巻数をローマ数字で記し、その後にページ数を添える。*La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de P.-G. Castex, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1976–1981, t. I–XII.)
- (3) *ibid.*, p. 874.
- (4) 子だくさんな母親「ジゴーニュおばさん」(mère Gigogne) のもじり。
- (5) *La Vieille Fille*, op. cit., p. 874–881.
- (6) *La Maison Nucingen*, CH. t. VI, p. 372–373.
- (7) *Le Barbier de Séville*, Acte II, Scène VIII. Garnier Flammarion, 1965, p.63 より訳出。
- (8) ウェルギリウス『アイネーエス』第4巻 173～188行。
- (9) *La Vieille Fille*, op. cit., CH. IV. p. 882–883.
- (10) *ibid.*, p. 873–874.
- (11) *ibid.*, p. 829.
- (12) *ibid.*
- (13) *ibid.*, p. 833.
- (14) *ibid.*, p. 936.